

「旅情を詠う」

山居 閑人

「夫れ天地は萬物の逆旅にして 光陰は百代の過客なり 而して浮生は夢の若し
歡を爲すこと幾何ぞ」

李白の「春夜桃李園に宴するの序」の一文であり、芭蕉の奥の細道の「序文」に、「月日は百代の過客にしてきかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。」と引用されています。

このように、昔から多くの文人達が旅に多くの時間を費やしてきました。その動機はさまざま、ある者は歌枕を求めするため、ある者は名所の見物のため、更にあるものは、配流の途中や、配流から許されての旅、故郷との往来のためなど様々でした。

これらの旅人達は、それぞれの動機に応じて、そのときの気持を詩歌に表しております。このたびは、「旅情を詠う」と題しまして、これらの詩歌を吟詠により紹介したいと思います。

漂泊の詩人と言えば、第一に李白が挙げられます。李白は、25才で蜀の地を離れて以来、短い長安での生活期を除いて、その殆どを旅に過ごしました。若いときから詩名は高く、若山牧水のように、何処に行っても歓迎される気楽な旅であり、その詩には、旅の喜びを感じさせるものが多数を占めています。

始めに、旅の途中で酒屋に立ち寄り、そのときの主人のもてなしに対してお礼に送った詩「客中行」を紹介いたします。もちろん、酒代はこの詩一編でおつりが来たでしょう。

蘭陵美酒鬱金香

蘭陵の美酒 鬱金香

玉碗盛來琥珀光

玉碗盛り来たる 琥珀の光

但使主人能醉客

但だ 主人をして 能く客をして酔わしめば

不知何處是他鄉 知らず何れの処か是れ他郷

李白が安徽省に遊んだとき、汪倫と言う人の家に滞在し、もてなしを受けました。別れに臨んで、桃花潭という川で舟に乗ったとき、岸から足を踏みならして詠う別れの歌が聞こえてきました。李白は早速、「汪倫に送る」という詩を作り、汪倫に送りました。汪倫は、この李白自筆の詩を、家宝としたと言われています。「汪倫に送る」を紹介いたします。

李白乗舟將欲行 李白舟に乗りて將に行かんと欲す

忽聞岸上踏歌聲 忽ち聞く岸上踏歌の聲

桃花潭水深千尺 桃花潭水深さ千尺

不及汪倫送我情 及ばず汪倫が我を送るの情に

日本において旅の歌人といわれるのは、先に紹介した若山牧水です。牧水の旅は漂泊の旅ではありませんでしたが、長男を「旅人」と名付けたほど旅が好きでした。酒を愛したことも李白と共通するものがあります。しかし、その歌には、李白と異なり「寂しさ」を詠ったものが多くあります。その代表作「中国を巡りて」を紹介いたします。

幾山河越えさり行かば寂しさのはてなむ国ぞ 今日も旅ゆく

旅の中には、地方から科挙の試験を受けるため長安に向かう旅もありました。孟浩然もそうした旅を経験した一人でした。試験のための状況であっても、やはり一抹の寂しさは感じたようですが、「自然派」と言われる孟浩然の詩風が良く表されています。この詩「京に赴く途中にして雪に逢う」を紹介いたします。孟浩然是受験に失敗し、官職に就くことなく隠棲生活を送ることになりました。

迢遞秦京道

迢遞たり秦京の道

蒼茫藏暮天

蒼茫たり 歳暮の天

窮陰連晦朔

窮陰 晦朔に連なり

積雪遍山川

積雪 山川に遍し

落雁迷沙渚

落雁 沙渚に迷い

饑鳥噪野田

飢鳥 野田に噪ぐ

客愁空佇立

客愁 空しく佇立するに

不見有人煙

人煙有るを見ず

実体験に基づいたものでないと思われ、少し脱線しますが、孟浩然の旅の詩としては、「歳暮南山に帰る」を採り上げないわけには行きません。孟浩然が宮廷で王維と文学

論をかわして居たとき、玄宗皇帝が現れて王維が紹介し、「詩を見せよ」とのお言葉にこの詩を見せたところ、「不才明主に棄てられ」の句を見て「朕は卿を臣下にしたこともないし、卿を見捨てたこともない。何故朕を誹るのか。」と不快を買い、絶好の仕官の機会を失ったという逸話で有名です。この詩を紹介致します。

北闕休上書

北闕 上書を休め

南山歸敝廬

南山の敝廬に帰る

不才明主棄

不才 明主に棄てられ

多病故人疏

多病 故人に疎んぜらる

白髮催年老

白髮 年老を催し

青陽逼歲除

青陽 歲除に逼る

永懷愁不寐

永懷愁て寐ねず

松月夜窗虚

松月夜窓に虚し

飄々として旅を続けた李白でしたが、まだ旅慣れないうちには、ふとしたことがきつかけとなり望郷の念を懐くこともありました。有名な「静夜思」は、李白が31歳の時の作とされ、蜀の故郷をはなれてから6年後の作です。「静夜思」を紹介いたします。

牀前看月光

牀前月光を見る

疑是地上霜

疑うらくは是れ地上の霜かと

挙頭望山月

頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷

頭を低れて故郷を思う。

西行も又、旅をした歌人でした。旅の途中で読んだ和歌三首を紹介します。

飽かずのみ都にて見し月よりも旅こそ月はあはれなりけれ
都にて月をあはれと思ひしは数にもあらぬさびなりけり
あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原

旅先で独り寂しく除夜を迎えるに当たっては、新年を迎えると言うよりも、ひとつ年をとつて老いが深まるという感じを受けたようです。高適もその一人で、その時の心境を「除夜の作」に表しております。高適47歳の時の作とされていますが、どのような旅の途中で作られたものかは明らかにされていません。この詩を紹介いたします。

旅館寒燈獨不眠

旅館の寒燈独り眠らず

客心何事轉悽然

客心何事ぞ転た凄然

故郷今夜思千里 故郷今夜千里を思う

霜鬢明朝又一年 霜鬢明朝また一年

大晦日に旅の途中にあつた詩人に頼山陽がいます。頼山陽は、大垣から舟で桑名に赴く途中でした。舟は、木曾川を通つて桑名に向かつたようです。その時の心境を詠つた「舟大垣を發して桑名に赴く」を紹介いたします。

蘇水遙遙入海流 蘇水遙々海に入つて流る

櫓声雁語帶鄉愁 櫓声雁語 鄉愁を帶ぶ

獨在天涯年欲暮 獨り天涯に在つて年暮れんと欲す

一篷風雪下濃州 一篷の風雪濃州を下る

旅の途中で大晦日を迎えた詩をもう一首紹介いたします。戴叔倫の「除夜石頭駅に宿す」を紹介いたします。高適の「除夜の作」と同じく「寒灯」が、寂しさを感じさせる言葉として、良く効いている詩です。

旅館誰相聞 旅館誰か相聞わん

寒燈獨可親 寒燈 獨親しむべし

一年將盡夜 一年 將に尽きんとする夜

萬里未歸人 萬里 未だ 人歸らず

寥落悲前事 寥落として 前事を悲しむ

支離笑此身 支離 此の身を笑う

愁顏與衰鬢 愁顏と衰鬢と

明日又逢春

みょうにち またはる
明日 又春に逢う

旅先で元旦を迎えた詩人もいます。釈清溪は、気楽な身で旅をしている時に元旦を迎え、宿無しの僧の身では世間の行事とは関係なく、炉端でのんびりしようとして詠っています。この詩「戊申歳首の試筆」を紹介致します。

湖上新正風雪天

こじょう しんせい ふうせつ
湖上の新正風雪の天

短蓑破笠又経年

たんさ はりゆ 又年を経たり

野僧不識世間事

やそう 世間は識らず世間の事

煨芋爐邊伸足眠

わいご 炉辺 足を伸ばして眠る

西行も度々旅をした人の一人でした。旅の途中で大晦日を迎えたときの心境は、ひとしお勝る寂しさでした。その心境を詠った和歌を紹介いたします。

つねよりも心ばそくぞ思ほゆる 旅の空にて年の暮れぬる

旅愁により眠れない夜を過ごす人もいました。杜牧もその一人であり、「旅宿」という詩に一人旅の愁いの感情を表しております。杜牧が何歳の時の作か分かりませんが、家からの手紙が届かない程の長い旅の途中の作と思われれます。「旅宿」を紹介いたします。

旅館無良伴

りょかん りょうばん な
旅館 良伴無く

凝情自悄然

ぼじょう おのずか しやうぜん
凝情 自ら悄然

寒燈思舊事

かんてう きゅうじ
寒灯 旧事を思い

斷雁警愁眠

だんがん しゅうみん
斷雁 愁眠を警ます

遠夢歸侵曉

遠夢 帰って 曉を 侵し

家書到隔年

家書 到るに 年を 隔つ

湘江好煙月

湘江 煙月 好し

門繫釣魚船

門に 繫ぐ 釣魚の 船

旅館における「寒灯」は、旅愁を増し、望郷の念を抱かせるものようです。白居易も

冬至の日に旅館に宿泊し、高適と同じような心境を詩に詠っております。この詩「邯鄲に至り、夜親を思う」を紹介いたします。

邯鄲驛裏逢冬至

邯鄲 驛裏 冬至に 逢う

抱膝燈前影伴身

膝を抱いて 燈前 影身に 伴なう

想得家中夜深坐

想い得たり 家中 夜深に 坐すを

還應說著遠行人

還た 応に 遠行の 人を 説著する なるべし

同じように、眠れない旅の心を詠った詩人に蘇軾の門下である「蘇門四学士」の一人晁補の父である晁端友がいます。その詩「西門の外に宿す」を紹介いたします。

寒林殘日欲棲鳥

寒林 殘日 棲まんと 欲するの 鳥

壁裏青燈乍有無

壁裏の 青燈 乍ち 有無

小雨愔愔人假寐

小雨 愔愔として 人は 仮寐し

卧聽疲馬齧殘芻

臥して 聴く 疲馬の 殘芻を 齧むを

唐の詩人李涉も、眠れない旅愁を「再び武関に宿す」と言う詩に著わしました。あてどない旅を続けるときに、谷川の水が旅愁を催させて眠れない様子を詠ったものです。この詩を紹介いたします。

遠別秦城萬理遊

遠く秦城に別れて 万里に遊ぶ

亂山高下入商州

乱山高下 商州に入る

關門不鎖寒溪水

関門鎖さず 寒溪の水

一夜潺湲送客愁一

夜潺湲 客愁を送る

陸游は、金に圧迫されている南宋において主戦論者であり「憂国の詩人」と言われていますが、政争に敗れて、晩年は田園で生活を送りました。長安にあった軍司令部が解散し、蜀の長官として向かう旅の途中で作られた「劍門道中微雨に遭う」は、数ある陸游の絶句の中でも屈指の絶唱とされています。果たして詩人として生きる決心が付いたのかどうか。それは、結句に表された乗り物が馬でなく驢馬であることに示されているとも考えられます。「劍門道中微雨に遭う」を紹介します。

衣上の征塵 酒痕を雜う

遠游 処として魂を消さざるは無し

此の身合に是れ 詩人なるべきや 未や

細雨 驢に騎って 劍門に入る

陸游の詩として、旅の途中で病に会ったときの詩があります。寒さによる風邪でしょうか。病のため、欄干に寄りかかって梅の花を見ることができなかつた残念さが詠われています。この詩「春雨」を紹介いたします。

春陰易成雨

春陰しゅんいん 雨あめを成し易く

客病不禁寒

客病かくへい寒かんに禁たえず

又與梅花別

又また梅花ばいかと別わかる

無因一倚欄

因よりて一欄いちらんに倚よる無し

日本の和歌集の中で、専ら旅の心情を詠ったものは『伊勢物語』でしょう。在原業平の作と言われ、東国に旅をする間の各地で読まれた歌が、簡単な物語として読み込まれています。そのうち、駿河国の宇津谷峠うつやにおいて作られた和歌を紹介いたします。この歌の裏には、恋人が自分のことを思っていてくれると、その人が夢に現れるということが、当時信じられていたことがあります。

駿河なる宇津の山へのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり

一般に、海に囲まれた日本や、中国でも河川での交通が開けた地方では、舟を利用した旅が多く、その旅情を詠った詩歌が多く作られています。これらを順次紹介していきます。最も知られたものは、張継の「楓橋夜泊」かうきょうやでしょう。寒山寺は戦果で荒れ果てましたが、この詩により、現在では一大観光地となっております。「楓橋夜泊」を紹介いたします。

月落烏啼霜滿天 月落ち烏啼からすないて霜天しもに満つ

江楓漁火對愁眠 江楓こいづつ漁火ぎよか 愁眠しゆうみんに對す。

姑蘇城外寒山寺 姑蘇こそ城外じやうがいの寒山寺かんざんじ

夜半鐘聲到客船 夜半やはんの鐘聲しやうせい 客船かくせんに到る

「楓橋夜泊」に影響を受けた和歌二首を紹介致します。

月に鳴くやもめがらすのねにたてて秋のきぬたぞ霜にうつなる（藤原為家）

月落ちて明くる外山の友がらす啼く音も寒き空の霜かな（武者小路実陰）

船旅の途中、今の南京で南北朝の時代の都であった金陵の近くの秦淮川に船泊した杜牧が作った詩として有名な「秦淮に泊す」があります。妓女達が唱う亡国の歌曲である「玉樹後庭歌」を聞いてやるせなくなつた杜牧ですが、真に非難しているのは、それを歌わせている客であり、杜牧が、唐の滅亡が近いことを予感していた為と思われまます。

煙籠寒水月籠沙

煙は寒水を籠め 月は沙を籠む

夜泊秦淮近酒家

夜秦淮に泊して 酒家に近し

商女不知亡國恨

商女は知らず 亡国の恨み

隔江猶唱後庭花

江を隔てて猶唱う「後庭花」

明の詩人高啓は、金陵に行く時に、杜牧の「秦淮に泊す」に和した詩「將に金陵に赴かんとし始めて閶門を出て夜泊す」と言う詩を作っております。杜牧と同じような光景を見て、夜眠れない気持を詠っています。

煙月籠沙客未眠

煙月沙を籠め 客未だ眠らず

歌聲燈火酒家前

歌声 燈火 酒家の前

如何出齣閶門宿

如何 纔かに閶門を出でて宿すれば

已似秦淮夜泊船

已に似たり秦淮 夜泊の船

宋の詩人范成は、「衡州に泊す」という詩に、船旅を十日間も続けたが、あいにく春の美しい景色を見ることが出来ず、目的地の衡陽について見ると、已に春過ぎ去ろうとしていることを知ったことを詠っています。この詩を紹介します。

客裏仍哦對雨吟

かくりしきり
客裏仍りに哦す對雨の吟

夜來星月曉還陰

やらいせいげつ
夜來星月 曉還た陰る

空江十日無春事

くうかうとおか
空江 十日 春事無く

船到衡陽柳色深

りゆうしやうへい
船 衡陽に到れば柳色深し

冬の船旅は、川霧で景色は見え、寒さに震えながらの旅であったようです。

宋の詩人楊萬里は、「庚子正月五日曉 大皋渡を過ぐ」という詩の中で、この様子を詠っています。この詩を紹介いたします。

霧外江山看不真

むがいこうざんみ
霧外の江山見て真ならず

只憑鷄犬認前邨

ただけいけんよ
只 鷄犬に憑つて前村を認む

渡船滿板霜如雪

とせんばんばん
渡船 滿板 霜雪の如し

印我青鞋第一痕

いんせいあいでいし
印す我が青鞋 第一痕

冬の船旅でも趣を感じた人もいます。まして、たまたま教養のある人と同じ舟に乗り、互いに文学論をかわすなど、大きな喜びであったでしょう。宋の詩人戴復古は、この時のことを「冬日舟を移し風を避けて峽に入る」と言う詩に表しています。この詩を紹介いたします。

棹入黃蘆浦

さおさし
棹 入る 黃蘆浦

驚飛白鷺群

おどきあし
驚き飛ぶ 白鷺群

霜華濃似雪

つるか
霜華 濃やかにして雪に似

水氣盛於雲

すいき
水氣 雲よりも盛んなり

市遠炭増價

市遠くして炭價を増し

天寒酒策勛

天寒くして酒勛を策す

同舟有佳士

同舟佳士有り

擁被共論文

被を擁して共に文を論ず

春の美しい景色を長めながらの船旅もありました。宋の詩人方岳は、清明の時節の船旅の様子を詩に詠っています。この詩「清明の日舟吳門に次す」を紹介いたします。

篷窗恰受夕陽明

篷窗 恰夕陽を受けて明かなり

楊柳梨花半月程

楊柳 梨花 半月の程

老去不知寒食近

老い去りて 知らず寒食の近きを

一篙煙水載春行

一篙の煙水春を載せて行く

秋の船旅は、やはり郷愁を誘うものです。明の詩人何景明は、このときの心境を「竹枝詞」という詩に詠っております。この詩を紹介いたします。一人の船旅では、悲しさを誘うとされている猿の声を聞かなくても、断腸の思いがすると詠っています。

十二峰頭秋草荒

十二峰頭 秋草荒る

冷煙寒月過瞿塘

冷煙 寒月 瞿塘を過ぐ

青楓江上孤舟客

青楓 江上 孤舟の客

不聽猿聲亦斷腸

猿声を聽かざるも亦断腸

舟で漂泊の旅をした人もいます。清の詩人張問陶もその一人でした。小舟をトンボに例え、自分を鶴に例えて、あてどない旅であることを示しています。この詩「黄州を過ぐ」を紹介いたします。

蜻蛉一葉獨歸舟

蜻蛉一葉 独帰の舟

寒浸春衣夜水幽

寒は春衣を浸し夜水幽なり

我似横江西去鶴

我は似たり横江西去の鶴

月明如夢過黃州

月明に夢の如く黄州を過ぐ

日本に於いても、船旅を詠った詩は多く作られています。その代表的なものを紹介していきます。始めに、頼山陽作「天草灘に泊す」を紹介いたします。この詩は、頼山陽が39歳の頃、九州各地を遊学した時に作った詩で、蘇軾の影響が見られます。

雲耶山耶吳耶越

雲か山か吳か越か

水天髣髴青一髮

水天髣髴 青一髮

萬里泊舟天草洋

万里 舟を泊す 天草の洋

烟横篷窓日漸沒

煙は篷窓に横たわりて 日 漸く没す

瞥見大魚波閒眺

瞥見す 大魚の波間に眺るを

太白當船明似月

太白 船に当たって 明月に似たり

続きまして、伊形靈雨の「赤間が関を過ぐ」を紹介致します。「赤間が関」は現在の下関海峡で、沢山の難所を通り抜け、やっと故郷の九州の山々が見えてきたことを詠って

います。

長風破浪一帆還

長風 浪を破って 一帆還る

碧海遙還赤間關

碧海 遙かに還る 赤間が関

三十六灘行欲盡

三十六灘 行くゆく尽きんと欲す

天邊始見鎮西山

天辺 始めて見る 鎮西の山

次に、木下犀潭の「壇の浦夜泊」を紹介いたします。平家滅亡の地で、安徳天皇の御

陵である「養和陵」がある壇ノ浦で船泊したときの詩であり、漁笛の音さえも、そのときの平家一門の恨みが籠もっているようであり、周りの景色を見るにつけても眠れなかったことを詠っています。

篷窓月落不成眠

篷窓 月落ちて眠りを成さず

壇浦春風五夜船

壇の浦の春風 五夜の船

漁笛一聲吹恨去

漁笛 一声 恨を吹いて去る

養和陵下水如煙

養和陵下水 煙の如し

万葉集には、柿本朝臣人麻呂の羈旅の歌八首が採録されています。いずれも船旅を詠ったものです。これらのうち、二首を紹介いたします。最初の和歌は、自分は漁師のように見えるかも知れないが、れっきとした官人であるという人麻呂の自負心を表したものとされています。

荒布の藤江の浦に鱸釣る海人とか見らむ旅行く吾を

次の和歌は明石海峡を通り過ぎる時の歌で在り、ここまできると、もはや自分の家の

ある大和地方も見ることができず、舟は西に向かつて遠ざかっているという、寂しさが感じられる歌です。

燭火の明石大門に入らむ日や 榜ぎ別れなむ家のあたり見ず

この辺で、趣を変えまして、陸上における旅の様子を詠った様々な詩歌を紹介していきます。旅のうちで特殊な旅として、戦場や兵役の任地に向かう旅があります。岑参は、辺塞詩人とされる詩人のうちで、岑参は、実際に西域に赴任した経験があり、其の詩には、実感がこもっています。岑参が西域の安西に向かう途中で作った詩を三首紹介します。

最初に、岑参が西域に向かう途中、たまたま長安に向かう使者に会ったときに作られた詩「京に入る使いに逢う」を紹介致します。長い間西域に留まり軍功を挙げようと覚悟していても、やはり望郷の念と家族への思いはありました。

故園東望路漫漫 故園 東に望めば 路漫漫

双袖龍鐘淚不乾 双袖 龍鐘として 涙乾かず

馬上相逢無紙筆 馬上に相逢うて 紙筆無し

憑君伝語報平安 君に憑つて 伝語して 平安を報ぜん

故郷を出た岑参は、二ヶ月もの旅をして、天に至るかと思われるほど西上を続け、ゴビ砂漠に辿り着きました。これから先は、砂と石があるだけの砂漠地帯。夕餉炊く煙も見えず、宿を取る家のあてもありません。心細さはつのるばかりでした。この時作られた「碩中の作」を紹介致します。

走馬西來欲到天 馬を走らせて西來 天に到らんと欲す

辭家見月兩回圓 家を辞してより 月の 兩回 円なるを見る

今夜不知何處宿 今夜 知らず 何れの処にか宿せん

平沙萬里絶人烟

平沙 万里 人煙絶ゆ

砂漠の中の旅も終わりに近づいたとき、岑参は、「磧を過ぐ」という詩を作りました。広大な砂漠を道に迷いながら進んでましたが、安西の地は、まだ西の天の果て、地の果てに遠くにありました。

黄沙磧裏客行迷

黄沙 磧裏 客行迷う

四望雲天直下低

四望は 雲天の 直下に低し

為言地盡天還盡

為に言わん 地尽くるに天還た尽くと

行到安西更向西

安西に行到するに更に西に向う

九州防護のために防人として徴用された人々の歌は、万葉集に「防人の歌」として採録されていますが、そのうち、任地へ向かう途中で作られた歌二首を紹介いたします。いずれも、残された家族への思いを詠ったものです。

最初に若倭部身麻呂作とされる歌を紹介いたします。

我が妻はいたく恋ひらし 飲む水に影さへ見えてよに忘れられず

続きまして、商長首麻呂作とされる歌を紹介いたします。

忘らむて野行き山行き我れ来れど我が父母は忘れせのかも

それでは、これから旅の途中で作られた詩歌で趣の深いものを紹介して行きましょう。旅には常に望郷の念が伴いますが、望郷の念を主としたものは別ジャンル出扱い、旅の趣を主としたものを採り上げることになります。

最初に、唐の詩人顧況の「角を聴いて帰らんことを思う」を紹介致します。故郷の美しい景色は夢の中のことであり、夢から覚めれば角笛の音が聞こえ、旅の途中の寒々と

した光景で断腸の思いがすると詠っています。この詩は、左遷されて任地に赴くときの作とされています。

故園黄葉滿青苔
故園こえんの黄葉こうよう 青苔せいたいに満みつ

夢後城頭曉角哀
夢後むご 城頭じょうとう 曉角ぎょうかく 哀かなし

此夜斷腸人不見
此この夜や 斷腸だんちやうす 人見ひとみえざるに

起行殘月影徘徊
起たちて行いけば 殘月ざんげつ 影かげ徘徊はいす

次に唐の詩人盧綸の「從弟瑾と同じく下第したる後 関を出づ」を紹介いたします。「下第」とは、科挙に不合格となったことを言います。失意の身にとっては、全ての景色がもの悲しく感じられるのです。

出關愁暮一沾裳
関かんを出いで暮くれを愁うれいて 一いつに裳しやうを沾うるす

滿野蓬生古戰場
滿野まんや 蓬ほうは生はえず古戰場

孤村樹色昏殘雨
孤村こそんの樹色じしき 殘雨ざんうに昏くく

遠寺鐘聲帶夕陽
遠寺えんじの鐘聲しょうせい 夕陽せきやうを帶おぶ

次に、唐の詩人韓偓の「尤溪道中」を紹介いたします。この詩は韓偓が福建省を流浪していたときに作られたと思われ、唐の滅亡期でした。どの村にも人や動物は住んでおらず、自然だけがいつものようであることに、杜甫の「春望」に似た悲しみが感じられます。

水自潺湲日自斜
水おのずは自おのずから潺湲せんせん 日おのずは自おのずから斜なめなり

盡無雞犬有鳴鴉
尽ことごとく 雞けい犬けん無なく 鳴鴉めいあ有あり

千村萬落如寒食

せんそんばんらく かんしよく
千村万落 寒食の如し

不見人煙空見花

じんえん
人煙を見ず 空しく花を見る

次に、唐の詩人雍陶の「嘉陵驛に宿す」を紹介いたします。故郷を離れている気持が

茫茫としているときに、秋の好景にあつたが、嘉陵駅のある刀州（蜀）の夢とすること
が出来ず、愁いが益々深まるばかりであると詠っています。

離思茫茫正值秋

りし ぼうぼう
離思 茫茫として 正に秋に値う

每因風景卻生愁

ふ ふうけい
風景に因る毎に 却つて愁を生ず

今宵難作刀州夢

こんしやう
今宵 刀州の夢を作し難し

月色江聲共一樓

げつしき けいせい
月色江声 共に一樓

旅を詠った杜牧の詩では「清明」が有名です。雨に降り込められてやるせない思いを
為している旅人に、牧童が酒屋のある桃の花が咲いている村を教えてくれる。現実の世界
から、俗世を離れた世界への飛躍を連想させる軽妙な詩です。

清明時節雨紛紛

せいめい
清明の時節 雨 紛紛

路上行人欲斷魂

じやうじやう
路上の行人 魂を断たんと欲す

借問酒家何處有

しやもん
借問す 酒家 何れの処にか有る

牧童遙指杏花村

ぼくどう
牧童 遙かに指さす 杏花の村

杜牧の「清明」に影響を受けた和歌を紹介致します。

はつせのや里のうなるに宿とへば霞める梅の立枝をぞさす (契沖)

蘇軾は、穎州の知事から揚州の知事に転勤を命じられ、そのたびの途中で「淮上早に発す」と言う詩を作りました。出発するときの情景を前半で詠いながら、後半で老境に入った気持を示しています。蘇軾が淮河を渡ったのは、この時が十回目でした。

澹月傾雲畫角哀 澹月 雲を傾けて 曉角哀し

小風吹水碧鱗開 小風 水を吹いて 碧鱗開く

此生定向江湖老 此の生 定めて 江湖に向いて 老いん

默數淮中十往來 黙して數うれば 淮中 十たび往來す

頼山陽も、京都と故郷の広島との間を多く往復しました。この蘇軾の詩は、頼山陽の「青山の歌」に影響を与えています。「青山の歌」を紹介致します。

青山昨送我 青山 昨 我を送り

青山今迎吾 青山 今 我を迎う

默數山陽十 往返黙して數うれば 山陽十たび往返

山翠依然我 白鬚山翠は依然たるも我は白鬚

故郷有親更 衰老故郷に親在り 更に衰老

明年當復下 此道明年 又 忝に此の道を下るべし

唐の詩人祖詠は、呉楚の地方を漫遊しているときに「江南旅情」という詩を作りました

た。この詩を紹介致します。江南地方の風景を描写すると共に、今は南斗なんとと言う場所いるが、家からの書もなかなか届かず、名物の橘の実を洛陽に送るすべもないと詠っています。

楚山不可極

楚山極む可らず

歸路但蕭條

歸路但蕭條

海色晴看雨

海色晴れて雨を看

江聲夜聽潮

江聲夜潮を聽く

劍留南斗近

劍は南斗に留めて近く

書寄北風遙

書は北風に寄せて遙かなり

為報空潭橋

為に報ず空潭の橋

無媒寄洛橋

洛橋に寄するに媒無し

旅の中で最も悲しいのは、親しい人と二度と会うことができない旅です。李白は、安史の乱のときに、永王の参謀となつたため反乱者として死罪を言い渡されましたが、拾遺のとりなしにより流罪に減じられ、長江を遡つて蜀の南になる野郎に向かいました。その途中、妻に宛てた「南のかた夜郎に流されて内に寄す」という詩を作りました。この後、李白は、白帝城まで来たとき、大赦に依り無罪とされ、「早に白帝城を発す」を作つて帰還することになりますが、李白の助命嘆願のために女同士となつた妻に会うことはできませんでした。この詩を紹介いたします。

夜郎天外怨離居

夜郎の天外離居を怨み

明月樓中音信疏

名月の樓中音信疎なり

北雁春歸看欲盡

北雁春に歸つて看尽きんと欲す

南來不得豫章書

南來に得ず 豫章の書

日本では、有間皇子の悲劇がありました。天智天皇の謀略にかかり、謀反の罪を着せられた有間皇子は、療養中の白浜温泉から都まで移送される途中、万一の生存を願って和歌を作りました。枝を結ぶのは、「折楊柳」と同じく、「輪」が、「還」に通じるからであつたでしょう。

この和歌を紹介いたします。

磐代の浜松が枝を 引き結び 真幸くあらば また還り見む

有間皇子は、李白と異なり絞首刑となり、再び結ばれた松の枝を見ることができませんでした。しかし、この出来事は、事情を知る当時の人々の同情を誘い、有間皇子に同情する和歌が多く作られております。そのうちのひとつを紹介いたします。

磐代の野中に立てる結び松心も解けずいにしへ思ほゆ

又、那波活所は、「巖城の結び松」という詩を作り、遺跡を訪れたときの感慨を述べております。この詩を最後に、『物語で楽しむ漢詩・和歌』「旅情を詠う」を終わります。

別離雖惜事皆空

別離 惜むと雖も 事皆空しく

縮柳結松情自同

柳を縮ね松を結ぶも情 自ら同じ

馬上哦詩猶弔古

馬上 詩を哦して猶 古を弔う

寥寥一樹立秋風

寥寥たる一樹 秋風に立つ

(令和2年9月19日作成)

参考文献等

『中国漢詩吟詠全集絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

『日本漢詩吟詠全集絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

『中国名詞集』井上律子著、岩波書店

『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版
ブログ「千人万首資料編和歌に影響を与えた漢詩文」

<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-yms/yamatouta/sennin/kansi.html#kansi></p>